

## 【すべての民族が救われるまで】

今日の聖書本文:ヨナ書4章1-11節・暗唱聖句:ヨナ書4章11節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)



今日はヨナ書について一緒に考えたいと思います。ヨナはイザヤ、ホセア、アモス、ミカなどの預言者たちと紀元前8世紀に働いていた預言者ですが、その名前の意味は‘鳩’という意味です。このヨナ書は4章の短い内容ですが、二つ特徴がありません。

一つは他の預言者たちはおもにイスラエルやユダに対する神様の裁きと救いを宣べ伝えていますが、ヨナ書は異邦の民族に対する神様の救いを預言していることです。そして、もう一つは、預言者ヨナが大きい魚のおなかの中で3日間過ごしたことや、魚がヨナを陸地に吐き出したことや、とうごまの話など超自然的な記事が多いと言うことです。そういうわけで、このヨナ書の歴史性を否定する方々もいましたが、ヨナ書も確かに主の靈感による聖書として歴史的事実です。これを裏付ける確実な証拠はイエス様から言われた言葉です。マタイの福音書12章40節でイエス様は、“ヨナは三日三晩(みっかみばん)大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。”と言われることによりヨナとヨナ書の歴史性を認められました。

## &lt;ヨナ書は何を語っていますか?&gt;

神の預言者‘ヨナ’はアマタイの子で、預言者として召しを受けました。彼への主の予言はとってもシンプルでした。2節を見て下さい。“立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。”でした。

ニネベという都市は当時アッシリアの首都(第二列王 19:36)として、今日のイラクにあるテルクユニク(Tell Kuyunjik)というところです。アッシリアはイスラエルの北にある国としていつもイスラエルを苦しめた敵国でした。その敵国の首都がニネベでした。これを2節では“あの大きな町”だと言ったのは大都市だからよりかは人口が多かったと言う意味が大きいです。

一般的に当時この都市の人口は30万人ほどだったと推測しています。しかし、ヨナはそれに従いたくありませんでした。それでヨナはニネベに行かず、ヨッパに下って、ニネベの反対方向のタルシシュ行きの船に乗って逃げてしまいます。タルシシュはいまのスペインの南の都市です。彼は船底(ふなそこ)に降りて横になってぐっすり寝込んでいました。つまり、ヨナは神様からの召しに従わない道を選んだわけです。

神様の命令を拒んでタルシシュに向かうヨナにどんどん困る事が起こります。神様が暴風を海に吹き付けたので、激しい暴風が起こり、船は難破しそうになりました。船長は船を軽くするために荷物を投げ捨てました。水夫(すいふ)たちも恐れ、どうしようもできなくなり、死の恐怖まで感じ、自分たちのそれぞれの神々に呼び始めました。なのに、ヨナは船底に降りて寝込んでいるのです。船長はヨナを起こしながら叫びます。“いま何をしているのか。早く起きてあなたの神にお願いしてみてください。!”そして、だれのせいでこのような災(わざわ)いが起きたのかくじを引いてみようと思います。結局ヨナが当たり、ヨナのせいでこのわざわいが起こった事が分かりました。それで、人々はいったいあなたは誰なのか、何をやる人なのかと問いかけます。そして、どうすればこの怒りの海を静める事ができるのか聞きます。するとヨナは答えます。それが12節です。

“私を捕えて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたがたのために静かになるでしょう。”確かにヨナはこの艱難の原因が何であるかをよく知り、結局自分の問題である事を認めています。

船に乗っていた人々はどうにかして陸地に向かうとしましたが、とっても無理だったので、仕方なくヨナを海に投げ込みました。すると海は激しい怒りをやめて静かになりました。ヨナは神様からのがれる事ができませんでした。神様は逃げていくヨナをよくご存知で、あのスペインに向かう船の底に隠れている彼をご覧になっておられました。ここで無所不在(むしょふざい)どころでも存在しておられる神様を見る事ができます。

詩篇139篇の内容が思い浮かんで来ます。

“たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕らえます(詩篇139:8-10)。”

愛する信仰の家族のみなさん!我々がどこに行っても神様の御顔を避けることはできません。全能なる主の御前で隠すことはできません。ヨナがニネベに行かず、逃げて行ったのをご存知だったし、そんな彼に分らせるために強風を吹き飛ばされたのです。ところが、このヨナ書で伝えようとするメッセージはどこにも存在される無所不在の神様を言おうとするものではありません。

ヨナ書の内容をもっと調べてみましょう。海に投げ込まれたヨナはどうなりましたか? ヨナ書1章17節をみてください。

“主は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。”神様は大きな魚を備えて、その魚のお腹の中で3日間過ごします。この時のヨナはもう死んだような状態でした(5節深淵・6節山々の根元まで、わたしのいのちを穴から引き上げて下さったなど)。

魚のお腹の中で祈った内容がヨナ書2章です。彼は切実な悔い改めの祈りをささげます。その祈りに答えて下さって神は三日後、魚を通してヨナを陸地に吐き出すように導いて下さいます。そして神様はふたたび使命を与えました。ニネベに行って悔い改めるメッセージを宣べ伝えるようにと命じられました。今回はヨナがすぐさま従いました。彼はニネベに行って40日が過

ぎたらニネベが滅ぼされると叫びました。その町は大きいので歩き回るのに三日もかかりました。ヨナによる主からのメッセージを聞いたニネベの民たちは断食を呼びかけ、自分たちの罪を悔い改め始めました。王もその知らせを聞いて王の服をぬいで、あらぬのをまとい、灰の中に座って悔い改めました。そして勅令(ちよくれい)を下して国家的悔い改めをうながします。これが3章の内容です。

預言者たちがイスラエルとユダの民に悔い改めるようにと叫んだ時は、かたくなの心で聞かなかったものの、むしろニネベの人々は即刻悔い改めることができました。どれだけイスラエルの民が神様の前で頑固なのかを照らし合わせてくれます。彼らの悔い改める祈りを聞いて神様は彼らに下そうとされたわざわいを思い直し、滅ぼしませんでした。これが3章の内容です。

### ユダヤ人だけが救いの対象なのか？

ところが4章をみると、ヨナは喜ぶどころか、ニネベの人々が悔い改めたことに対して非常に不愉快になりました。4章1節をみてください。ヨナは怒っています。“ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って主に祈って言いました。”そして、3節ではいきなりヨナは自分が生きているより死んだほうがましだとつぶやいています。ニネベの人々の悔い改めになぜ腹を立てるのでしょうか？ここでこのヨナ書が我々に伝えようとする大切なヒントがあります。ヨナには一つ固執している事がありました。ユダヤ人だけが救われるべき民であるという思いでした。そういうわけで、ニネベの民が悔い改めて救われることが気に入らなかったのです。実際、彼がニネベに行って悔い改めるように宣べ伝えなさいという神の命令を拒んでタルシシュに逃げた理由もここにありました。神様の預言者でしたが、ヨナはニネベの民が懲らしめられ、滅ぼされる事を願っていたのです。しかし、ヨナはよく知っていました。神様は恵み深く、慈愛に満ちていて、哀れみ深い方なので、ニネベの民が悔い改めて神に立ち返ると、神様が裁かない事を知っていたので、悔い改めを言わないで、タルシシュに逃げたわけです(4章2節)。

彼がタルシシュに逃げたのは信仰がなかったわけでもなく、習慣的な不従順のためでもありませんでした。ただ、一つの理由のためでした。つまり、**イスラエル民族自分たちだけ救われるべき民だと信じていたからです**。つまり、ヨナは偏った民族主義者だったのです。ニネベはアッシリアの首都だと申しました。アッシリアはたえず、イスラエルを脅す敵国でした。そういうわけでニネベがきらいで、彼らが救われる事を願いませんでした。神様はこのようなヨナの思いを直そうとしたわけです。神様は“あなたはなぜそんなに怒っているのか”と叱りました。しかし、ヨナはニネベの町が見える町の東の方に座って、仮小屋を作ってニネベの様子を見ようとしていましたが、一本のとうごまが生えてきて日陰になってくれたので、ヨナは非常に喜びました。ところが、次の日には一匹に虫が出てきて、かんでしまい、とうごまは枯れてしまいました。暑すぎて死にそうになったヨナは衰え果てて“私は生きているより死んだほうがまし。”とつぶやきます。すると神様はとうごまが枯れたことでなぜ怒っているのかとヨナを叱ります。10節と11節です。

“あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまの惜しんでいるのに、まして、この大きな町ニネベに住んでいる右も左もわきまえない十二万の人間と、数多くの家畜などをわたしが惜しまずにいられようか？”

### すべての民族に与えられた救いの福音

ヨナ書の簡単にまとめましたが、このヨナ書は何を語っているのでしょうか？神様はすべての人が救いに導かれる事を喜んでおられる方である事を示して下さい。ヨナは自分の民だけが救われるべき選民だと思って、他の民族に行って伝道する事を拒みました。アッシリアが敵国という民族的感情のため逆に滅ぼされる事を願っていました。しかし、神様はこのように偏って民族主義をもっているヨナの考え方が直される事を願われました。そして、イスラエルの民だけが救われる民であるという固定観念がやぶれる事を願われました。神様はすべての民、すべての民族が救われる事を願われ、すべての人に愛をもって臨まれます。ですから、ユダヤ人だけではなく、異邦人とすべての民族が福音を聞いて悔い改めて救われる事を願っておられるのです。これがヨナ書をとおして与えられる神様からのメッセージです。

この普遍的愛を神様はイエス様が生まれる2700年前にすでにヨナ書をとおして教えて下さったのです。ルカはイエス様の誕生がユダヤ人だけではなく、“民全体のためのすばらしい知らせ(ルカ2:10)だと言いました。しかし、ペテロもヨナのように偏った民族主義者でした。彼もユダヤ人だけが救いの対象だと考え込んでいました。このペテロの考え方も直される出来事が使徒の働き10章でした。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰のみなさん!

我々も間違った固定観念の壁を越えなければなりません。さきほど読んだ本文の4章11節で二つの単語に注目したいですが、一つ目は‘この大きな町’という単語です。この単語は4回出ます。1章2節と3章2節、そして3章3節と4章11節に出ます。この大きな町というのはニネベが大きな都市である事言っているのだと解釈する事ができます。ヘブル語では“ハイルハゲドラレエロヒム”ですが、これを直訳すると、“神様にとって大きな町”という意味です。つまり、神様にとってニネベもとても大切な町という意味です。人々の目で彼らは異邦の民族として、敵国としてしか考えないとしても、神様はその町さえも大切に思われるという意味です。なぜなら神様はすべての民族が救いに至る事を願ったおられるからです。

二つ目の単語は、“右も左もわきまえない人間”という単語です。これはここに住んでいる幼児以上の人を意味します。一般的にニネベの人口を30万人に見ていますが、“右も左もわきまえない十二万人以上の人間”というのは幼児を含むと60万

人ほどで考えられます。靈的に言うと、神様を知らないすべての人々を言っているわけです。神様はこの右も左もわきまえない人々(どんな神が真の神であるか、どうすれば真の神による救いを得る事ができるかも分からない)でさえも愛しておられる事を教えて下さっています。

#### <結論>

ヨナの思いと神様の思いは違っていました。ヨナは自分の民だけが救われるべきだと思っていましたが、神様の思いはそうではありませんでした。神様はすべての民族、すべての人種関係なく救われる事を願い、神様の愛はすべての民族に及びます。まるで、あっちこっち関係なく雨を降らせ、同じく太陽を照らして下さるように、神様は我々の考え、我々の民族感情の限界を超えての普遍的愛を表して下さいます。北朝鮮も、イスラムの人々も、時には我々が憎んでいる人も、私たちに苦しめる人々も、自分に害を与える人々が死んだら良いのにとおもうかもしれませんが、彼らも神様の愛される子供たちである事を覚えなければなりません。

我々は自分たちの固定観念から抜け出なければなりません。自分が嫌いな人も神様にとっては大切な人であり、神様の目では大切なたましいであることを覚えなければなりません。神様は今日も神様によって造られたすべての民族が神様を知り、信じて救われる事を待っておられます。この宣教の働きのために短期宣教師や7月末から今年も宣教のチームが来ます。神様は今日もこの日本の神様を知らずに死んでいく1億2千5百万人の多くの魂のために、この小牧の16万人ぐらいの魂の救いを助けるために働き人を送ってくださいます。我々もともに協力してキリストの愛の道具として用いられる事を願っておられます。主の救いの福音の道具としてキリストの犠牲の愛を持って仕え、一人の魂でもみなさんを通して救われる感激を味わえるクリスチャンプレイズチャーチのすべて神の家族となりますよう主の御名によって祝福します。アーメン!